

## 天狗諸生の明治

市村眞一

### 一 はじめに

日本が近代国家と呼べるようになるのは、大日本帝国憲法の施行と国会開設の一八九〇年（明治二三）あたりからだろう。それまでは政治・経済・社会など各方面で江戸時代の残渣のなかで人々は生きてきた。つまり、時代は明治に改元されたが、政治・社会も含め、人々の生活と考え方は江戸時代とさほど変らない期間が続いたことは確かなのだ。だから、明治時代に入ってから水戸では、幕末維新時と変わらず、天狗諸生の抗争、というより天狗党側による諸生派への弾圧が続いた。したがって、このことは近代史の範疇に入らないともいえようが、明治に改元したことを大きくくりとして近代国家に向け歩みだしたことは事実であり、今回は明治初期における水戸での出来事

を近代史としてあえて検証してみる。

### 二 明治元年の攻防

一八六八年（慶応四）三月一〇日、城代家老鈴木石見守の屋敷から水戸を脱出した諸生派の家老市川三左衛門を中心とする市川勢と、形勢逆転した天狗党・本園寺勢の天狗諸生の抗争は、明治になってからも続いた。

九月八日に慶応から明治に改元するが、この日、市川勢は会津藩とともに新政府軍と会津城付近で戦っている。水戸藩の市川勢追討軍の先発隊と市川勢が高田で遭遇したのも、このころ。若松城落城後、市川勢は桑名藩兵や新撰組、旧幕府軍と協議し、水戸に向かう。目的は、市川勢は水戸城の奪還であり、桑名藩は藩主がいる仙台に向かうため、海路、銚子から旧幕府軍艦に

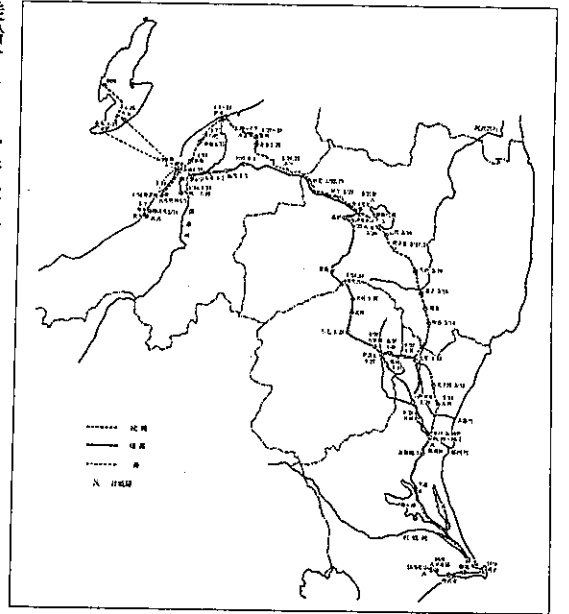


写真0

乗船すること、新撰組と旧幕府軍は、やはり銚子から旧幕府軍艦で旧幕府軍と新撰組が集結した函館に向かうことだった。そこで、水戸經由で銚子を目指すことにし、市川勢に同行した。その後、市川勢と水戸藩兵は弘道館の戦いで多くが戦死する。桑名藩兵らは、水戸藩内の抗争としてほとんどが参戦せず、先に銚子に向けて出発する。敗れた市川勢も後を追ひ、玉造で合流。船で霞ヶ浦から利根川に出て、銚子に着く。そこで守備にあたっていた高崎藩から旧幕府軍艦は銚子には来ないことを知らされた桑名藩兵、新撰組などは降伏し、東京に護送され、釈



写真1

放された。市川勢は水戸藩の追討軍が追ってくるのがわかっていたので、降伏せずに東京に向かった。八日市場で追討軍に追いつかれるが、このとき市川勢は約八〇人。当初五〇〇人いた仲間が一六%まで減っていた。その多くが越後や会津、大田原などの戦場で戦死し、一部は離れていった。



写真2

八日市場の決戦を前に、市川三左衛門は解散し、生き延びることを提案する。同意し、各地に散っていったのは半分、残る四〇人ほどは最期の戦いを挑む。そして全滅する。この間の様子は、水戸市史中巻五、史談会速記録、銚子市史、八日市場市史、松山戦争記録などに収録されている。そのなかで、市川勢の側から記録されたものは史談会速記録だけだ。写真0は、市川勢が行軍した軌跡を紹介した水戸市史に掲載された地図。写

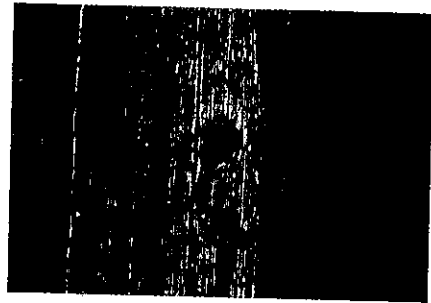


写真3

真1は、水戸市の薬王院にある鈴木石見守家の墓所。鈴木は市川らと太田村で別れ、江戸に向かい、家族と捕縛され、水戸に連れ戻され、家族とともに処刑された。写真2は、新潟県西山町の灰爪の丘にある市川勢が新政府軍との戦いで最大の犠牲者を出した場所に建てられた供養碑。写真3は、市川勢と水戸藩が激突した弘道館の戦いのすさまじさを残す正門の柱に残る弾痕。

### 三 市川三左衛門の捕縛と処刑、大森は公津の戦死

三

市川勢を率いたのは、家老市川三左衛門のほか佐藤國書、朝比奈弥太郎、笹助大夫、大森弥三左衛門の四人の家老。佐藤は越後寺泊で病没したが、あとの家老四人は最期まで戦う。一月六日、八日市場松山台での決戦は水戸藩追討軍約五〇〇人に対して、市川勢は一〇分の一以下。勝敗は戦う前に決まっていたが、市川勢の戦いはすさまじく、最初は追討軍が後退した。まもなく態勢を整えた追討軍により市川勢は全滅するが、重傷を負った市川は追討軍から逃れ、近在の剣術家大木佐内宅に隠れ



写真4

た。写真は、市川勢が全滅した松山台に、明治になり地元の人々が供養に建てた「脱走塚」＝写真4。大木は、市川と江戸で剣道場が一緒だったことから市川を匿い、傷の手当をした。しばらく逗留したが、匿われているという噂が流れ、市川は東京に出る。三女徳が嫁いだ芝三田の宝徳寺に身を寄せたが、追っ手がくるとみて、やはり剣道仲間の青山百人町の島上源兵衛宅に潜伏。翌年二月二十六日、水戸神勢隊が島上宅を囲み、市川を捕縛した。そのときの様子は、史談会速記録二三に小又慶二郎の談話として掲載されている。小又は那珂郡出身の農民。天狗党で、敦賀での処刑を免れ、若狭小浜藩に約百人の仲間と預けられ、優遇され、明治維新になって釈放されると、武田金次郎らと京都で本願寺勢とともに江戸、水戸に戻って諸生派に復讐する。インタビューを実施したのは、一八九四年（明治二七）一月二十七日。その証言の一部を紹介する。「雨の降る晩でございました。一小隊行きまして、家を取り囲みました。撃術家でありましたから、灰を紙に包みましたがたくさんありました。村上快助が隊長で行きました。ここは水戸か



写真5

ら来たとい  
うてはいけ  
んから、尾  
張から来た  
というのが  
よろしかろ  
うというの  
で、偽名を

名乗って行ったところが、どうかここで繩をかけないように  
いうので、それはよろしいといいましたら、先生と一緒に連れ  
て出ました。手に短刀を持っていました。すぐそのまま式台に  
引き出して繩をかけてしまいました。本来は駕籠にでも乗せて  
行くべきのを、大雨の中をずぶ濡れで今の砲兵本署の前の水道  
橋の入墨御門のところに行つて、市川覚えがあらうと云うた  
ところが足が動かなくなつた。この市川は器量も何もなく、つい  
ている者がよければかりでえらい人のように云いましたが、実  
意地のきたない奴で、情いふことを知らない。打たれても叩  
かれても一向平気であつて、それから責めが済んでから、好き  
なものがあれば食わしてやるからというので、鰻飯が食いた  
いというので、それをとりに食わせましたら、平気で食いました。  
あとで聞くと三日棒縛りになして、それから磔にされたそう  
です」と答えている。写真5は、市川三左衛門のガラス板肖像画。

市川は、水戸に連行され、獄舎で拷問を加えられたうえ、城



写真6

だ、三左衛門  
の墓が建てら  
れたのは、一  
九一七年(大  
正六)六月。  
建てたのは曾  
孫にあたる弘  
勝と書いてあ

る。弘勝は、当時七歳の幼児だつた。

実際に建てたのは、娘の徳や孫娘だろう。彼女たちは、母、  
祖母で三左衛門の妻だつた幾志が一〇一歳で天寿を全うした翌  
年に、幾志と三左衛門、弘道館の戦いで戦死した長男主計らの  
名前を刻み、表には「俱會一処」と書いた小さな墓を建てた  
写真6。幾志は、武田金次郎に命を狙われたことがあるという。  
それ故、市川家の将来を案じて、孫娘に男子(弘勝)が誕生し  
た場合、孫娘一家を跡継ぎにし、男子を幾志の養子とした。二  
男が生まれると孫娘夫妻は元の姓に戻り、弘勝が市川家を継い  
だ。だから、墓は弘勝の名前で建てたのだろう。もちろん弘勝  
は、孫娘の手元で育てられた。戸籍上のみ市川家の後継となつ  
たわけだ。

墓碑の表に刻まれた「俱會一処」とは、仏教用語で「老少不  
定で相前後してこの世を去つたものが、弥陀の願力で共に西方  
浄土に往生して共に一処に会合すること」とある。墓碑に刻ま

下を引き回されて、四月三日、長岡原(現在の水戸市吉沢町あ  
たり)の処刑場で、ほかの諸生派とともに処刑された。斬首が  
一五、六人、磔が一〇数人だつたという。そのときの様子を、  
明治新聞の抜書という水戸藩紀事には「逆磔にかけられたり、  
もつとも逆磔というは生きながら逆さまに致し置きと致し置  
きの上に致し置き候故由、元來人を逆さまに致し置きときは  
忽ち死する故、額に穴を明け血を出し候得は生き居り候由にて、  
三左衛門の額を鏝にてもみぬき穴を明け、其の党数人残らず刑  
せらるるを見せ其の上にて突殺候事よし」と生々しく紹介して  
いる。さらに、天保明治水戸見聞実記には「長岡原の刑場へ見  
物人山の如く詰め掛け尺寸の地をも余さず、並木の両側へは  
鉛菓子などを売る商人等余多見世を張り其状恰も祭礼場の如  
し、刑場へ斯く大勢出掛けしは前代未聞と人々語り合へり」と  
刑場の周囲の様子を伝えている。加えて、室田義文翁譚は「覚  
悟していたとみえて、三左衛門は声一つたてず、ジロジロ見物  
人の方を見ていた。それで群衆のなかには却つて気持ちが悪  
くなつて帰つていく者もあつた」と書いている。市川の最期が、  
いかに凄惨なものであり、その処刑の様子を多くの人々はどの  
ような気持ちで見つていただろうか。

#### 四 三左衛門の墓

市川家の墓所は、水戸市の祇園寺の墓地の一番奥にある。た

れた言葉は、残された遺族の彼らへの強い思いだろう。

#### 五 三左衛門の直系の子孫がいた

三左衛門の長男には妻がいて、幾志とともに赤沼の獄につな  
がれていたが、維新後開放された。妻は妊娠していたが、出獄  
後出産すると、赤子とともに死亡したという話が伝えられてき  
た。最近まで、そのような話が諸生派の子孫の間で語られてい  
た。ところが、拙著「市川勢の軌跡」が出版された二〇〇八年  
(平成二〇)に、著者のもとに「直系の子孫」と名乗る人物が  
訪ねてきた。聞くと、赤子(男子)は亡くならず、まず幾志の  
実家である那珂湊の寺に匿われ、天狗党に知られるのを恐れ、  
女中に預けられ、領内の同じ宗派の寺を廻り、最後は女中  
の実家がある現在の千葉県佐倉市に匿われ、育てられ、やがて  
市川三左衛門の直系の孫であることを明かされたという。その子  
孫たちは、そのことを決して口外してはならないと言ひ  
伝えられ、今日に至つたが、訪ねてきた人物の父親が、



写真7

訪ねてきた人物の父親が、

「市川勢の軌跡」を読んで、是非、著者に事実を知らせて来い  
というので訪ねてきたという。赤子は八十吉といい、成人して  
佐倉町役場の職員になったという。写真7の右から二人目。

市川家を継いだ弘勝氏は、そのことを話さなかった。知らな  
かったのだろうか。あるいは、知っていても話せなかったのだ  
ろうか。幾志はどうだろう。自分の那珂湊の実家に赤子が預け  
られたことを承知してはいないとは思えない。ただ、黙っていた  
可能性はある。幾志は、生前、武田金次郎に狙われていたと漏  
らしている。自分が命を狙われるということは、直系の子孫、  
しかも男子がいると知られば、ましがいなく殺されただろう。  
幾志は、自分の長男の子供を天狗党から守りぬく決意をもって  
いたと想像できる。それ故、本来ならば直系の孫に市川家を継  
がせるところを、隠し通し、狙われることのないだろう外孫の  
子に市川家を継がせることで、直系の孫を守り、かつ市川家の  
存続を図ったものと考えられる。

## 六 明治初期の諸生派への弾圧

水戸市史下巻(一)に復籍士族が紹介されている。明治初年  
に本園寺勢の弾圧を恐れて脱走した旧門閥派の藩士や市川勢の  
藩士で、廢藩時に藩に属していなかったから家禄は支給されず、  
士籍を失っていた。そのため秩禄処分の対象からはずされてい  
た。彼らが、明治初期に最も生活に困窮した。彼らは、廢藩置

生方農民の政治的結末をどのようにとったかの一端を明らかに  
することができよう。またこの新田自体からみれば、いわば政  
治的な犯罪人を主体とした労役が一役を買って完成された新  
田であり、しかも水戸藩最後の藩営、茨城県最初の引き継ぎ開  
墾場となったところである点は、一つの特色ある新田といいう  
るものである」と紹介している。驚氏は、明治時代に入り、水  
戸藩時代の藩内抗争の最終的勝者Ⅱ天狗党側が、敗者Ⅲ諸生派  
側の人物を「犯罪人」として新田開発の労役に課した事実を、  
地域に残るさまざまな文献を丹念に精査し、具体的に明らかに  
した。

そのなかで、驚氏は、水戸藩が一八六九年(明治二)に出し  
た布達をもとに、中津原開墾に就労させられた犯罪人が「元治  
甲子の変以来、村々に於いて家毀しや竹槍勢に参加し、諸生に  
組した村民であった訳で、慶応四年(明治元年)藩権力の逆転  
によって罪を得た人達であった。このことは用水普請といった  
差し迫った事情下にはあったものの、通常の場合のように扶持  
米を給する必要もなく、反対に徒刑扶持代を納入した上に犯罪  
人小屋に拘禁し、必要普請への強制労働、しかも政敵諸生派に  
組した者に対する赤頭巾赤小印の懲罰という点では、天狗派か  
らすれば一石二鳥三鳥の政策であった訳である」と指摘してい  
る。

また、水戸市史中巻五には、一八六九年(明治二)に新政府  
が水戸に送り込んだ密偵が「水戸藩政の担当者は執政の鈴木縫

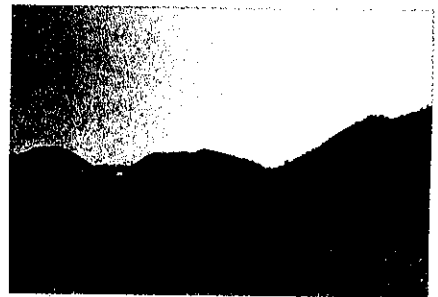


写真8

復籍を果たした彼らは、さらに復籍も帝國議會に請願したが、  
認められなかった。

「大子町史研究」第一一号に、驚松四郎氏の論文が掲載され  
ている。「中津原新田の開墾と犯罪人の使用」だ。そのなかに  
一八六九年(明治二)から水戸藩が犯罪人の使用を開始、そこ  
に諸生派が含まれていたと指摘している。一八七一、二年にか  
けて行なわれた久慈川の中津原新田開墾Ⅱ写真8では多くの諸  
生派が罪人として労役を課せられたことも明らかにしている。

驚氏は、「はじめに」のなかで、中津原新田開墾(大子町)と  
犯罪人の使用を論議にした理由にふれ「犯罪した人達の所業を  
明らかにすることによって、水戸藩が水戸県となり茨城県とな  
る迄の間、諸生に組した村民をどのように処置したか、即ち諸

殿、山口徳之進、三木左大夫、尾崎豊後、参政の名越十蔵、山  
野辺外記であり、これを民生掛の新井十左衛門、市川養四郎、  
石川伝蔵、加治九良次郎と市政掛の井坂四良左衛門が補佐して  
いる。城下は家数一万軒で繁昌の地であるが、家来は天狗組と  
諸生派の二派にわかれ、明治元年三月以来、天狗組が政権を担  
当しているが、藩内は混雑を極めていた。混雑の原因は天狗組  
政権が誕生してから、諸生派の頭取であった鈴木石見、市川三  
左衛門を磔刑としたあと、潜んでいた仲間を召し捕り、梟首、  
磔、刎首などで処刑しており、それらは明治元年以来二年七月  
頃までに約三〇〇人余に達しているのも一因である。また当時、  
諸生派ないしその同調者で入牢の者は百姓・町人を含め約一〇  
〇人程もあり、このほど三五人が磔および梟首になり、七月八  
日には梟首二人、磔一人が予定されている。水戸領鯉淵村とそ  
の周辺二八カ村は諸生派に荷担し、元治元年以来、大勢が紛争  
に参加したので、今日、天狗組の七、八人が申し合わせ鯉淵村  
名主庄次郎親子を切り殺し、その上これら村々の重立百姓のう  
ち一〇軒ほどを關所に申し付けた。また領分の村々では竹槍組  
を組織し、諸生派の指示に従っていた者のうち頭立った者は徒  
罪、そのほかも刎首を命じている。(中略)水戸藩は藩政改革  
により役職名を變更し、兵制も整えたが、領内で農兵を取り立  
て、定日を設け、城下に詰め合わせて当時から訓練に努めてい  
る。明治元年三月以来、脱走した諸生派の穴を埋めるため、尼  
子専之助が周旋し領内の百姓または他領で仕官を望む者、およ

そ二〇〇人を新規に雇い入れている。このなかには無頼の徒などもおり、彼らは昨年暮れに放逐された」と実態を生々しく伝えている。

## 七 生き抜いた諸生派たち

### 内藤趾叟

内藤は、市川らと行動を共にしなかった。保守派のなかでも鎮派と呼ばれ、穩健な考え、行動をし、市川らと一線を画していた。しかし、天狗党や本園寺勢は保守派全体を許さず、暗殺し、あるいは捕縛して処刑した。このため、内藤ら鎮派も市川勢から遅れること三か月、藩外に逃亡することになる。學者で、軍事家でもある内藤は信望があり、弟子も多かった。内藤は、彼ら連れて水戸を脱出し、太田を過ぎたあたりで吉野英臣のグループと合流。会津若松を目指すことにするが、奥州須賀川で弟子たちを吉野に預け、彼らは仙台に向かい、内藤だけが単身会津若松に入った。なぜ一人になったのか、内藤は記録に残していないので不明。内藤は、回想録といえる「悔慚録」のなかで「若松城では一時軍師的役割を果たし、棚倉城が新政府軍の手に落ちた（慶応四年六月二十四日）あと、すでに新政府軍の拠点となっていた白河城攻撃にも、同志の人々と共に再三参加した」と書いている。ただ、この間の経緯について、会津戊辰戦史など会津藩側の史料には触れられていない。その後、若松

して万感の思いを込めて書いたことが伝わる文章だ。

### 今村喜左衛門孝本

今村喜助二〇〇石の長子喜左衛門。市川勢に加わり、八日市場で解散したとき、生きる道を選ぶ。水戸市の祇園寺にある市川勢の殉難者名を記した恩光無辺碑に、その名があるが、実は生きていた。遠州光明寺に隠棲したが、明治三年、中泉郡役所物産方に胆力を見込まれ、当時、地元で大問題となっていた大井川通船を実現するために仕事を失うと反対していた川越人足の説得を頼まれ、彼らを通船業に転職させることに成功。その実力が認められ、小学校の教員、地元の水戸長、森町町長、島田町助役など務めた。今村孝本略伝に、市川勢として水戸を脱出してから会津、越後、佐渡、越後、会津と転戦した経緯を詳しく紹介。その点は興味深い、「水戸を脱出してきた者の話では主公（藩主篤慶）が旧武田の家臣に毒をもらわれ、亡くなったという。同志怒り、協議して水戸に帰り、逆賊を討って主公の仇をうち、水戸城に快復の旗を掲げ、若松城の声援を成さんと決し、会津藩の佐川官兵衛に話したが、佐川に必死に止められた。しかし、決意は固く、佐川と別れ、水戸に向かった」との部分に同意できない。会津若松城が落城し、市川勢が水戸行きを決めた理由の説明だが、この話は、今村が語り残したものを略伝に書きとめたものか不明であり、かつ市川勢が水戸に向かう理由としては「新説」。ただ、藩主毒殺説は、ほかの文献に

城が落城すると米沢に逃れたあと、仙台に潜んでいたが、水戸からの追っ手がくると知り、舞草村（岩手県一関市）の下駄職人鈴木留五郎方に一年余り潜伏したことは「悔慚録」に記されており、事実、鈴木氏の子孫宅には内藤がお札に残した記名人りの陣羽織が残っている。記名は「徳川旧臣 大草与左衛門正直 行年四二」。四二歳は明治元年にあたる。大草は変名だ。

内藤は、野州の知人の紹介で、名前を借りて湯沢姓を名乗り、湯沢正直という名前で山形県吏になる。一八七三年（明治六）省に出仕、四年後には東京府に転じて、旧制中学校長を経て一八八六年（明治一九）、六〇歳のとき文科大学（東京大学の前身）教授となった。のちに「徳川十五代史」を著し、評価を得るが、その例言に「徳川旧臣 内藤趾叟識、時に六十六」と本名を記している。「悔慚録」には、逃亡中に一時行動を共にし、仲間を預けた吉野英臣が仙台藩を頼り、青根温泉に潜伏中、仙台藩に騙され、水戸藩の追っ手に引き渡され、水戸の長岡原で市川らと処刑されたことにも言及。また、「吾母なる人は（中略）余は国を去りて後行衛しれず、如何の禍に罹れるならんと思ひ遣られし心中はいかばかりなりけん。然るに余は幸に万死を免れて、後には天朝の官員たるに至りしかば、母の老後の悦びは実に意外のことなりし、是余が幸に生を保ちたる故に大不幸の子たるをも免れたる也」と記している。水戸藩の幕末維新時に敗者として生きた内藤が、同じ時代を生きた母の心境を察

はまったく出てこないし、市川勢の水戸行きに関する諸説のなかにもなく、篤慶の病氣や水戸藩の状況を考えても合理性に欠けるといわざるをえない。

略伝には、川越人足の反対で実現できずにいる大井川通船を依頼された今村が了解し、「一川船三艘を掛塚港より海上を大井河口川尻村へ廻す。而して今村と（同道の）半兵衛が川尻村に行き、三艘の船に乗船し、引かせて廻ること二里、時に夜三更（子の刻）矢口村に息ふ偶聞く島田金谷の者共八百人船の通るを待ち到らば打毀したんと其設けあると水主共皆恐怖し孝本等も亦覚悟を極め事起きたらば腕力を試んと乃ち目釘を濕し五更（寅の刻）矢口村を出立曉に島田金谷の間を登に番人の焚き残したる火未だ消えず実に危うき所と云うべし又廻ること一里余横岡村に着す同じく物産方手付村松庸三郎その村に來り迎ふるあり共に船の恙なくその地へ到りたるを賀す」と船の通行を妨害しようとする八百人が待ち構えているなかを無事通過したことを記している。

また、その後、仕事を失う人足たちのために通船業務に再雇用させ、自らは帰農したことを書いている。役所は今村の働きを評価し、教員となることを願う。ただ、脱藩した者は帰郷致すべしとの布達があり、今村は一八七三年（明治六）に帰郷する。が、現実には厳しく「母上兄弟に会い、互いに恙無きを賀す。本籍に復族仰せつけらる。但し録は賜らば依つて将来活計の策を議るに多年脱出の故を以つて殆ど貧窮に至り且茨城県下に於

いては到底生活の道立たざるを知り、家族親戚と熟議以つて静岡県に貫族替えを願ひ聞き届けの上籍を神座村に移し静岡県士族となり十月に至り帰村せり。明けて明治七年初めて生徒の試験を受け同八月訓導試験を拝命」とある。諸生派が茨城で生きるのは困難と判断し、静岡県士族になり、教員の道を選んだ経緯を明らかにしている。その後の今村は、教員生活を経て、静岡県職員などいくつかの職を歴任後、周知郡山科村戸長、同郡山梨村戸長、同郡森町議会の推挙で町長となる。

略伝に記されたことはここまでだが、島田市史下巻によると、今村はその後一八九四年（明治二七）から一〇年間島田町助役を務め、一九二〇年（大正九）に七七歳で死去した。

#### 佐々木猶造

佐々木治兵衛二〇〇石の長男猶太郎。一七歳の時、父とともに市川勢に加わり、各地を転戦。混乱のなか父は若松城に入り、戦死した。はぐれた猶太郎は、会津藩の横山伝蔵隊に加わっていたが、新政府軍の若松城包圍網が固く、横山は死を覚悟し突入することに決した。その際、市川勢の猶太郎に再拳を圖れと一〇両を与え、別行動するよう指示。やむなく単身火原峠に向かったとき、偶然に市川勢の伊藤隊と桑名藩の部隊に遭遇。行動を共にし、仙台に向かおうとして、途中、庄内藩の一隊と出合い、庄内行きを勧められ、同行。庄内藩とともに新政府軍と戦った。

菩提寺の信願寺。両親の供養を行い、親類を廻り、弟の所在を尋ねたが確認できず、困り果てたが、翌日、偶然に萩原家の養子になっていることが判明。そのお宅を訪ね、二人は四七年ぶりの再会を果たした。猶次は、その時の二人の感激を書き残している。その六年後、捨吉は鶴岡の兄宅を訪問した。それから三年後、猶造は一九二二年（大正一一）九月に七二歳で死去、弟捨吉は、それから二ヵ月後の同年一月、あとを追うように六二歳のとき水戸で病没した。猶次は、父親の波乱に満ちた人生を子孫に伝えようと書き残した。（父今村猶造を語る 水戸を脱藩し庄内へ 今村猶次「より」）

#### 寺門彦太郎

額田北郷の組頭寺門登一郎は、諸生派に属し、地元の人々を率いて一八六四年（元治元）の天狗諸生の戦いで天狗党と戦った。県北地方では大きな勢力を張り、諸生派の水戸藩士に負けない奮戦を展開。天狗党に恐れられた存在だった。登一郎は、やがて市川勢に加わり、北越まで同行するが、新潟で一行と別れ、江戸に出て捕まり、額田で処刑された。長男の彦太郎が一三歳のときだった。

彦太郎は、類が及ぶのを恐れた親類の手で、登一郎が懇意にしていた長岡藩士のもとに逃がされた。しかし、すでに長岡藩は新政府軍に敗北し、城下は混乱していた。訪ねた長岡藩士の姿はなく、彦太郎は北上し、関谷村下関の名主、三衛門に助け

会津藩が降伏すると、庄内藩も降伏するが、藩主酒井公は、新政府軍から他藩の兵士を引き渡すよう求められるも応じず、桑名藩兵と伊藤隊は東京に密かに送られ、難を逃れた。この時、市川勢の猶太郎と伊藤要蔵は少年のため庄内に匿われ、猶太郎は家老水野蔵之丞の計らいで水野良助家に生まれ、名を利勝とされた。このことで、猶太郎は新政府軍に捕らわれずに助かった。

治兵衛の妻で猶太郎の母親不天子は、水戸にあって治兵衛の戦死と合わせ、猶太郎が庄内で生きているといううわさを聞き、侍女を伴い、百里の道をはるばる庄内まで訪ねてきた。庄内藩は、「猶太郎はいたが、負傷して死亡。遺骸は大誓寺に葬った」と偽りを告げ、母親に對面させなかった。実際、新政府軍に對して、そのようなことを話していたという。猶太郎の身を案じての措置だった。母親は、猶太郎の無事を知らず、泣く泣く帰ったという。そして明治三年に没した。

一八七二年（明治五）一〇月今村家の養子となった猶太郎は、翌月義父今村甚太の死去に伴い、今村家を相続し、名を猶造と改めた。彼には一〇歳離れた弟がいた。捨吉という。身は庄内にあつても、母親のこともあり、古里の家族について思わぬ日はなかった。猶造の子供も父の思いを知り、何とか古里に帰す機会を考えた。一九一四年（大正三）七月、東京で大正博覧会が開催されたのを機に、長男の猶次は父猶造を連れて東京に出ると、その足で水戸に向かった。まず訪ねたのは、先祖が眠る

られ、その才能を認められて隣の医師、佐藤玄信を紹介されて、書生となった。約四年間の修行により、佐藤は彦太郎を見込んで東京の医学学校済生学会で学び、医学試験を受けるよう手配してくれた。生活費は、同じ関谷村下関の金物屋の主人が彦太郎の人柄を見込み、援助してくれた。主人は、佐藤医師のもとで医学を学んでいた彦太郎に娘を嫁にしてほしいと三衛門に申し込み、いわばそれを条件に生活費を出し、娘を東京に行かせて彦太郎の世話をさせた。

その間、彦太郎を逃した伯母は一八八〇年（明治一三）に寺門家の戸籍再興を果たす。また、一八八九年（明治二二）には「寺門登一郎維新の際叛逆首謀の科により家名断絶のところ家名再興差許す 茨城県知事 安田定則」との家名再興も実現させた。

そして、多くの人々の好意によって、彦太郎は同年に医術開業前期試験に合格。六年後に後期試験に合格した彦太郎は、晴れて東京で開業医となった。もちろん、金物屋の娘を嫁に迎えた。水戸を離れて三〇年が経ち、彦太郎は望郷の思い断ちがたく、夫婦で古里に帰ったが、寺門家はすでに弟が継ぎ、何となく気まずい雰囲気があり、早々に東京に帰った。それから五年後の一九〇〇年（明治三三）、彦太郎は妻の実家を頼り、新潟県中条町に転居し、開業した。そこで子供も生まれ、家族三人の生活が始まった。彦太郎は、開業医としての仕事だけでなく、地域社会との関わりを大切にしていた。具体例として、中条町から

約四キロ離れた柴橋村の柴橋小学校の学校医を務めた。また、腸チフスや赤痢など伝染病が流行すると、隔離病院の医師も勤めている。地域に貢献を惜しまなかった。

とはいえ、古里は古里。新潟に戻った彦太郎は一九一六年（大正五）、額田に父親の墓を建てた。だが、軽い脳卒中のため墓参りに行けず、翌年六六歳で亡くなった。彦太郎の妻は、彦太郎の出身地によい思いを抱いていなかったことから、その息子良治（小学校長）は母親に遠慮し、母と妻に内緒で彦太郎の菩提寺に毎年お盆になると送金していた。良治の死後、それを知った妻と娘の登志は、その遺志を継いで祖父彦太郎の墓参りを続けてきた。（彦太郎さま 新潟県 寺門登志より）

#### 菊池慎之助

水戸藩に「二田」あり、と称された藤田東湖と戸田忠敏。二人は安政の大地震で圧死した。家老戸田の長男、忠則は譜生派でも鎮派で、市川にうとまれ、獄中死する。三男の道守（藤三郎）も諸生派で鎮派。道守は、市川勢と行動を共にせず、身に危険が迫ってくると妻と幼子二人を連れて水戸を脱出。福島藩に向かう。同藩は天狗争乱のとき、幕命により天狗党と戦い、奥羽列藩同盟にも加わっていた。

戸田一家は、物乞い状態で福島市郊外の荒井村にたどりつき、農家に匿われた。新政府軍が会津若松に進軍する途中だった。明治になり、道守は地元小学校教員となり、妻も教員となっ

入隊した慎之助は、何かの機会にそれを知り、自らの墓に父親の名を刻んだ。

養子となった菊池家だが、東京都在任の慎之助のご子孫宅に残る位牌に「菊池右仲 藤之進 慶応年間国難にあい脱藩、芳野昇太郎と変名し、明治維新に際し、芳野家別立す。ここにおいて二女菊池氏を継続す。後世、芳野氏の祖先、菊池氏の疑いあらんことを恐れ、概略を記し、後備に付す。芳野親義書 明治一四年四月一五日」とある。一八八四年（明治一七）に没した芳野昇太郎と芳野親義こと菊池右仲は、もと水戸八幡宮の宮司。神官隊の一員として本圀寺勢に加わり、京都に駐留。まもなく抜けて香川敏三とともに陸援隊に加わり、やがて新政府軍の一員として活動する。このころ名を芳野に変えている。維新後も芳野姓で裁判官として明治政府の役人を務めた。ただ、元の菊池姓を残そうと二女に婿を取らせ、菊池姓を継がせたことが位牌からわかる。また「芳野氏の祖先、菊池氏の疑いあらんことを恐れ」とある理由は不明。彼が、水戸出身であることを隠そうとしたのはなぜだろう。ともかく、菊池家を継いだ二女の娘が慎之助を婿に迎え、菊池家を後継した。戸田家と菊池家は、水戸にあっては天狗・諸生の間柄だが、戸田忠則の長男忠正（道守のいとこ）は裁判官だったし、一時、慎之助を養子にしたこともあるので、裁判官同士の芳野との縁から慎之助が菊池家の養子に入っても不思議はない。

慎之助の母親は鳴井マツという。道守とともに福島県荒井村



写真9

て家計を支えた。一八七六年（明治九）から一〇年間、道守は荒井小学校の校長を務めた。一八六六年（慶応二）生まれの長男、慎之介は

一八七九（明治一二）に隣村の佐倉村小学校教員となるが、翌年には退職し、陸軍教導団歩兵大隊に入り、歴代陸軍大将全覧大正編によると「明治一九年に陸軍士官学校に入学。同二二年に少尉任官し、陸軍大学に入る。明治二八年に菊池家の養子となり、名を慎之助と改名。同三〇年大学卒業し、日露戦争のときは第四軍管理部長から副官となり出征。大正二年に少将となり歩兵第五旅団長。その後、人事局長など務め、朝鮮軍司令官のとき、大正一二年に大將に昇進。翌年、軍事参議官兼東京警備司令官に転じる。大正一五年から亡くなる昭和二年まで教育總監兼軍事参議官を務め、六二歳で病没」し、青山霊園に眠る。II 写真9。

慎之助は、茨城県で唯一現役の陸軍大将だ。青山霊園の墓には、家族の名前も刻まれているが、その最初に父道守の名がある。道守は、地元の小学校の校長を退職後、古里が恋しかったのか茨城県に戻り、水海道市あたりで客死したという。陸軍に

の教員を務めたが、道守が茨城に帰る前の一八八一年（明治一四）に病死した。三七歳だった。墓は、荒井地区の一角にあるが、教え子たちが建てた。墓石の下部に教え子たちの名がずらりと刻まれている。慕われていたのだろう。戸田一家は、水戸市酒門の水戸藩共有墓地に家老戸田忠大夫の墓があり、長男忠則の墓は近くの常照寺にある。三男道守は東京・青山墓地の息子慎之助の墓に名が刻まれ、道守の妻マツの墓は福島県福島市荒井地区にあるように、ばらばらだ。時代に翻弄された一家を象徴するように思える。

#### 伊藤辰之助

市川勢のなかで異色の存在といえるのが伊藤だ。水府系纂には一渡辺半介に属し、元治元年六月、賊徒（天狗党）から水戸城下を守る。湊村部田野原で数度戦い、十数人を討ち取る。戦功を賞せられ金五両を賜う。まもなく百石を賜い、馬廻組となる。賊脱走すると追討し、月居峠で砲撃し、山田村に入り、再び賞され白銀二枚を賜う」と紹介されている。渡辺半助は鎮派だが、伊藤は武勇に優れ、市川勢の中でも強硬派だった。市川勢が越後を転戦した様子が戊辰戦史、会津戊辰戦史などに散見されるが、伊藤の名が多く登場する。水戸藩だけでなく、新政府軍からも恐れられていたことがわかる。それゆえ「鬼」「鬼辰」と呼ばれたのだろう。

伊藤は、市川勢にあって越後の戦闘でも武勇を発揮した。出

雲崎代官所を市川勢が屯所とした際、薩摩藩の密偵、富山弥兵衛を捕らえ、旅籠の一室の柱に縛り付けたが、逃げ出す事件があった。薩摩藩出身の富山は、以前、新撰組に属し、伊東甲子太郎のもとで行動したが、伊東が近藤勇と意見が合わず、脱退して高台寺党を結成した際は、伊東についていく。伊東が新撰組に暗殺されると、敵討とばかりに他の仲間と近藤を狙撃し、怪我を負わせた。その後、新政府軍に入り、江戸に行くこと、越後探索を命じられた。その富山が皮肉にも水戸藩の伊藤の部隊に捕らえられた。逃亡を図ったが、伊藤隊に追い詰められ、谷津田で殺された。近くの教念寺に地元民が建てた供養塔がある。伊藤は、市川勢が会津藩と行動を共にするなかで桑名藩と動く。北越戦争に奥羽列藩同盟が敗れ、会津城に撤退した際も、桑名藩の部隊と会津城を目指したが、城下がすでに新政府軍の支配下におかれ、城に入ることができず、仙台から蝦夷を目指そうとした。途中、庄内藩の部隊と遭遇、誘われて二五人の部下と桑名藩の部隊とともに庄内藩に同行する。新政府軍と戦うが、会津藩が降伏すると、庄内藩も降伏する。ただ藩主の酒井公は、官軍から他藩兵士を引き渡すよう命令を受けると、これを無視し、彼らを匿って東京に逃がす。

伊藤は、けがをしていたため、同行できず、会津喜多方に留まり、治癒すると一人東京に出る。西郷隆盛が下野し、決起するという話が流れていた時期で、警察は伊藤の素性を知り、密偵として働くよう勧める。新政府軍と戦っただけに了承し、西

郷を支持するグループに近づくが、動向を探るうちに彼らの考えに共鳴し、仲間に入ってしまった。結局、逮捕され、一八七八年(明治一)に約三年の懲役刑を言い渡され、拘留所暮らしを経験する。

釈放されたあとの伊藤が、どのような生き方をしたのか不明だが、二〇〇六年(平成一八)、東京大学に歴史学者大類伸博士の江戸時代の城郭史学・兵学に関する貴重な資料が子息から寄託された記事が東京大学助教授によりネットに掲載された。それをみると、「大類博士は明治一七年二月に伊藤辰之助とじゆんの二男として東京市日本橋区で生まれたとある。辰之助は同年九月に亡くなり、仲は大類家の養子となった」と記してあった。この辰之助が水戸藩の伊藤辰之助と同一人物か不明だが、可能性は高いと思う。東京大学に寄託した子息は、小田原市在住の元高校教師だが、伊藤のことは親から聞かされていないという。

#### 黒崎雄二

大子村の郷士、黒崎藤右衛門の三男で大三郎。父親は一八六四年(元治元)の天狗諸生の戦いの際、諸生派に属していた。幕府軍と諸生派に敗れ、京都を目指して水戸藩を脱出しようとした天狗党が大子村に来たとき、地元の諸生派を指揮し、戦ったが、多数の天狗党に敗れ、戦死した。このとき大三郎は一歳だった。

市川勢が水戸を脱出し、会津を目指したとき、長兄藤右衛門(襲名)とともに市川勢に加わり、各地を転戦する。一六歳。市川勢で最年少だった。市川勢は、二〇〇日以上、千キロ以上の行軍をし、約五〇〇人いた兵士は八日市場では八〇人に減っていた。ほとんどが戦死、あるいは途中ではぐれてしまった。八日市場で市川は、追っ手がすぐ近くまで来ているので、ここで解散しようとしたというが半分は了解したものの、半分は最後まで戦うことを主張。大三郎は、兄と生きる道を選び、東京に逃れた。戦いを選んだ人々はほぼ全滅した。



写真10

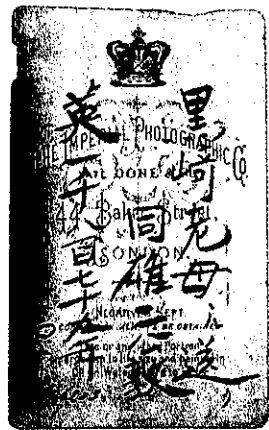


写真11

大三郎は、一九〇二年(明治三五)、五〇歳のとき史談会のインタビュに答えている。史談会速記録合本二五、二八に残されているが、市川勢の軌跡を当事者が語った唯一の証言として貴重な内容だ。戦いから三

〇年以上経てのインタビュだけに、内容は一部誤解や思い違いもみられるが、全体として市川勢の動向と、大三郎の当時の考えを知ることができる価値ある証言といえる。

黒崎は、一八七三年(明治六)二歳のときに横浜から船で渡米した。明治政府の欧米視察団(岩倉具視団長)が帰国する年である。そのような時期に、なぜ彼が渡米したのか、あるいはできたのか不明。はっきりしているのは、彼が一〇年後に英国から浄土真宗の高僧北島道龍の通訳として帰国したことだ(北島道龍師 天竺行路次所見一より)。

また、大子町の実家を管理している子孫に残された資料を拝見させていただいたとき、大三郎が二七歳のとき、ロンドンから母親に宛てた本人の写真が保存されていたことを確認できた。写真10。裏面には、黒崎が書いた墨書があり、名前が雄二と改められていた。写真11。彼がどのような目的で外国に出たのか不明だが、英国に国費留学した化学者の高峰謙吉は、ロンドンで知り合った黒崎が帰国すると、すぐに黒崎に会社を設立しようと呼びかけていることが、「高峰謙吉の生涯」に記されている。その会社は、高峰が米国の博覧会に出張することになり、実現しなかった。黒崎は、その後、神戸に行き、貿易会社を設立し、英国に米穀を輸出しようとしたことが、当時の大坂朝日新聞広告に掲載されている。ただ、その後、東京に戻ってからの生活は不明だ。墓は、池袋の寺院にあるが、雄二の子孫は黒崎の渡米も知らず、写真の存在も知らなかった。



## 八 天狗党のその後

では、諸生派を弾圧した天狗党や本圀寺勢の幹部は維新後、どのような人生を送ったのだろうか。一八六九年(明治二)一月、水戸藩は政府の命令により藩政改革を実施する。政務局、軍事局、司農局を置いた。政務局長は鈴木重義(本圀寺勢)、軍事局長は山口正定(同)、司農局長は尾崎為貴(無派閥)。版籍奉還後、新たな藩制改革のため藩知事昭武が帰国し、弘道館に到着したのは同年七月二日だった。水戸城に入らなかつたのは、すでに版籍奉還しており、領土支配の象徴といえる水戸城を避けたためといわれる。八月二日には職制改正を開始した。従来の士族の役職、俸禄を廃止し、新たな職制に基づく首脳人事も決定した。水戸市史下巻(一)によると、大参事は松平安房(無派閥)、権大参事鈴木重義・山口正定・武田金次郎(天狗党)・三木左大夫(同)、小参事藤田健(無派閥)・野村彝之介(本圀寺勢)、権小参事酒泉正元(天狗党)・藤田任(無派閥)・服部正義(本圀寺勢)・原田明善(無派閥)・矢野唯之允(同)、大隊長尾崎為貴(無派閥)・大森多磨(同)、家令長谷川作十郎(本圀寺勢)。職金(給与)は、大参事七〇〇両、権大参事・大隊長三五〇両、小参事三五〇両、権小参事二五〇両など。

一八七一年(明治四)七月、廃藩置県が実施され、中央集権

権を奪った本圀寺勢や天狗党も、結局は明治という新しい時代の波に乗り切れず、「水戸」という狭い範囲から抜け出ることなく、排他的な意識を捨てられなかったことが伺える。その意識は、現代も底流に流れているように思える。

### 参考・引用文献

- 水戸市史中巻(五)
- 水戸市史下巻(一)
- 史談会速記録二三、二五、二八
- 銚子市史
- 八日市場市史
- 松山戦争記録
- 水戸藩紀事
- 天保明治水戸見聞実記
- 室田義文翁譚
- 大子町史研究第一号
- 悔慚録
- 会津戊辰戦史
- 今村孝本略伝
- 島田市史下巻
- 父今村猶造を語る 水戸を脱藩し庄内へ 今村猶次
- 彦太郎さま 寺門登志
- 歴代陸軍大将全覽大正編
- 水府系纂

体制の確立が図られた。水戸藩は水戸県と改称され、藩政の実質はそのまま県政に移行された。また、第二の廃藩置県といふべき新府県の設定は、同年一月に行われ、このとき水戸県も廃止され、茨城県が誕生する。最初の県長官として山岡鉄舟が同年十一月一三日に茨城県参事に任命された。在任期間は二〇数日と短かった。権参事は水戸県の大参事だった山口正定が任命された。また、水戸県から茨城県に事務引き継ぎが終わらないうち、二月から翌年一月にかけて、旧水戸藩家中の兵をすべて非役とし、それまで藩庁定詰めだった一、二番隊も東京鎮台詰めにする指令があった。これにより旧水戸藩の権力機構は実質的に解体された。

一八七二年(明治五)七月二〇日、県令心得として旧大村藩士で新政府の大蔵大丞を務めた渡辺清が入県。その一週間後、水戸城が放火され、物見櫓を除き、本丸がすべて焼失する事件が起きた。八月に、首謀者の三木左大夫、酒泉直、藤田任ら旧水戸藩士族一四人が逮捕された。三木は、山口に次ぐ権大参事、酒泉と藤田は権小参事で、みな水戸県の幹部だった。事件は、うやむやのまま一八七四年(明治七)五月には釈放された。新政府に権力を奪われることに対する旧水戸藩士の反発が背景にあつたといわれている。鈴木重義、三木左大夫、武田金次郎らの晩年は、香川敬三文書には哀れとしかいいようのないものと紹介されている。

こうしてみると、明治になり諸生派を弾圧し、水戸藩の指導

### 戊辰戦史

- 西南記伝下巻二
- 北畠道龍師天竺行路次所見
- 高峰讓吉の生涯
- 大坂朝日新聞
- 新規収蔵の大類伸博士旧蔵江戸時代城郭史学兵学関連資料コレクション
- ヨシ 東大総合研究博物館助教授 西野嘉章